百々裏話(46)

おもて　あきら

〔音曲道歌雑考―その八―〕

・歌の漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群中の歌順を示す。

(5)徳丸肥前高長道歌

能楽研究所に『観世秘伝書』と題する謡の伝書がある。謡伝書の多くがそうであるように、素姓を異にする各種の伝書を寄せ集めた本で、世阿弥の『音曲口伝』や金春禅鳳の『五音之次第』等をも含み、同じく能楽研究所蔵の『塵芥抄』(異本)と特に関係が深い。江戸中期筆と見られる大型本一冊である。

この『観世秘伝書』の末尾に、百余首の音曲道歌が掲載されている。「稽古歌拾三首」「口伝廿首」などと六つの見出しを設け、見出しに掲げる歌数を合計すれば一一五首になるが、実数は一〇九首である。然るに末には「以上百弐首」とあって、少なからぬ誤字・誤脱が存在することを示しているが、他に同種の道歌群の写本の存在を知らないので校合できないでいる。解し難い所(傍線部)は原本のままの形にして、今回と次回とに分けて全容を紹介しておきたい。

なおこの道歌群は、最終の歌によって、天正二年(一五七四)九月に徳丸肥前高長なる人物が詠んだことが知られるので、「徳丸肥前高長道歌」と仮称しておく。文字づかいをわかりやすく改めたことなどは、以前と同様であり、括弧内は私見による補いである。

稽古哥拾三首

1、わらはべに謡すすめてつらぬるは
　を(か)しとも見よ狂歌はいかい(二七三)

2、謡数覚えてよきは一調子
　二機三声の符も法ハれ(二七四)

3、五音とは謡の奥のならひとは
　最初に知らで叶はぬといふ(二七五)

4、あら謡習ひ始めの一二返
　耳にとむるを肝要と聞く(二七六)

5、おぼえたる謡を人に稽古せば
　今を始めて聞く心地せよ(二七七)

6、師の謡重きかろきの心得は
　つけて謡ふに知られこそすれ(二七八)

7、教ゆるは習ふよりなほ音曲の
　稽古と知りて友を語らへ(二七九)

8、稽古せず座功も入らず心がけぬ
　謡はいかで晴にたたまし(二八〇)

9、稽古せず辛労もせず謡ふをば
　上手に成るといふ秘事もあり(二八一)

10、音曲は上手に成りて心をば
　初心に持てといひ伝へけり(二八二)

11、種々の習ひ有りとはいへど口なれて
　謡ふ人こそ上手とはなれ(二八三)

12、教ゆると習ふとにこそ其の人の
　謡の位あらはれにけれ(二八四)

心持十五首

13、音曲の二字の心もしらぎぬの
　うらごゑになる事ぞ悲しき(二八五)

14、師の道をかるく思ふに音曲の
　文字も拍子もおもく成りけり(二八六)

15、師の道をつよく謡はば梓弓
　いかでかもとの節に帰らん(二八七)

16、耳草(甘)を口にふくめる心あれば
　謡の節はをのづからなる(二八八)

17、心がけば謡の身持ち顔ばせは
　鏡見るにも及ばざりけり(二八九)

18、寄り合ひて初心初心の謡ふにも
　またその内の功者にはつけ(二九〇)

19、稽古する時にも晴れの謡にも
　上手のあたり見つつ覚えよ(二九一)

20、謡をも拍子もちがへ言ひかけば
　心乱らず本筋にやれ(二九二)

21、かゝりぼも何心なく言ひ流し
　さらとかゝるを謡ひ手といふ(二九三)

22、忘れたる人の謡を言ひつぐは
　師弟の中か時によるべし　（二九四）
23、して方に付くる心の同音は
　声のないこそ肝要と聞け　（二九五）
24、文字ごとに心をつけてかるがると
　心とめぬを謡ひ手といふ　（二九六）
25、平生を晴とたしなみ晴をまた
　常の謡と心得てよし　（二九七）
26、小謡も一番能も聞く人と
　座敷によりて長く短く　（二九八）

声二十首

27、声づかひ野山を分くる人はなれ
　寝られぬ床も舟をゆくにも　（二九九）
28、能謡晴れの謡の前ごとに
　声のこしらへ有りとこそ聞け　（三〇〇）
29、つかふ声のむきたる時を本として
　謡ころさぬ習ひなりけり　（三〇一）
30、宵々に物数うたへ暁は
　声を痛はる習ひなりけり　（三〇二）
31、横の声又音の声（の）あるなれば
　声につかはれ声をつかへり　（三〇三）
32、声をつかひ高く謡ふを本といふ
　かはらぬ時はひきくたしなめ　（三〇四）
33、声はただ臍より出だせ同音も
　役者になるも力有りけり　（三〇五）
34、暁に限ると知らば謡ひ手の
　誰かは声をつかはざるべき　（三〇六）
35、立ち声も時に至りてつまるなり
　声にかまはで曲をたしなめ　（三〇七）
36、よき声も謡の下手はつまるなり
　上手は枯れてなほ面白し　（三〇八）
37、立ち声を弱く出だして音曲に
　力のあらば何を思はん　（三〇九）
38、喉の内うるほふ時の声はよし
　かはかぬやうに常にたしなめ　（三一〇）
39、今日晴れの謡といはば暁に
　二こゑ三こゑしらべざらめや　（三一一）
40、音を聞き曲を聞くこそ謡なれ
　音ばかりにて曲なきは憂し　（三一二）
41、立ち声も酒や肴をまかせなば
　息短くて何か謡はん　（三一三）
42、立ち声の文字も聞えず延べ縮め
　早くしたるき謡ひ手もあり　（三一四）
43、身持ちをも妻も禁ぜよ声のみか
　命のためになほもよければ　（三一五）
44、阿仙訶子縮砂川芎人参や
　耳草少し蜜丸にせよ　（三一六）
45、加薬には桔梗や蒲黄胡椒少し
　ふくめ宝生家の薬ぞ　（三一七）

調子十首

46、謡ふとも当季の調子祝言を
　心得るこそ最初なりけれ　（三一八）
47、春は双夏は黄鐘秋は平
　冬は盤渉土用一越　（三一九）
48、五調子に生老病死苦あることは
　聞き伝へけり知る人に問へ　（三二〇）
49、五調子は喉歯に当たる鼻の先
　まゆかたならず口伝ありけり　（三二一）
50、一流は歯と唇と鼻の先
　眉と面会に口伝ありけり　（三二二）
51、五調子は双一黄二盤三や
　一四平五と口伝ありけり　（三二三）
52、吹物の調子を何と知らぬ身も
　心静めて聞けばそれなり　（三二四）
53、小座敷は調子をひきくほけやかに
　謡けなげにいきいきとあれ　（三二五）
54、立声もさのみ調子の高ければ
　誠のふしは謡はれぬとぞ　（三二六）
55、調子いかにひきく有るとも音曲と
　力の入れば心がけなり　（三二七）

〈次回へ続く〉（42・1・6）

表紙の写真——二月の例会より——巻絹・若松宏充　撮影＝吉越立雄